

## 【講演会等報告】

## コンサート「遊牧の民の調べ：モンゴルの馬頭琴とカザフのドンブラ」

西村 幹也

開催日：2009年3月15日（日）14：30開場／15：00開演

開催場所：北海道大学 遠友学舎

主催：北海道民族学会・NPO 法人北方アジア文化交流センターしゃがあ（共催）

後援：北大文学研究科北方研究教育センター

2009年3/15、北海道大学遠友学舎にて15:00より17:00まで、途中15分程度の休憩を挟んで、「遊牧の民の調べ」コンサートを催行した。正確な人数は数えていないため判らないが、おおよそ40名ほどの方々の参加を得た。

まずはカザフ人の住むモンゴル国バヤンウルギー県の写真スライド&トークで、演奏者クグルシン氏の生活背景について簡単に紹介し、続いてカザフ民族楽器ドンブラの演奏と弾き語りを楽しんでもらった。15分間の休憩後、ゴビ地域について写真スライド&トークを行い、演奏者ネルグイ氏の生活背景を紹介し、ゴビ在住の馬頭琴演奏家ネルグイ氏の演奏となった。最後には、両氏のセッション5曲を披露してコンサートは終了した。

このコンサートは、NPO 法人北方アジア文化交流センターしゃがあ（以後、NPO 法人しゃがあ）と北海同民族学会の共催で開催された。NPO 法人しゃがあは、1995年より、「モンゴルとはいかなる所であり、どのような人々が、どんな暮らしをしているのか」を伝えることを目的に活動が続けてきた“モンゴル情報紙しゃがあ編集室”を前身とし、2008年にNPO 法人認証をうけている。

コンサート活動自体は2003年に始まった。専門教育を受けずに馬頭琴を習得し、演奏活動を続けてきたゴビの天才馬頭琴弾きと呼び声高きネルグイ氏を招聘し、舞台芸術とは違う、自由な音楽演奏スタイルによる本来の馬頭琴の姿の片鱗を日本各地に紹介している。2007年からは、モンゴル国西部のバヤンウルギー県在住のカザフ人、クグルシン氏をツアーメンバーに迎え入れた。クグルシン氏も、ネルグイ氏同様、在野の演奏家として有名な方である。

## コンサート：クグルシン氏の部

カザフ人たちの音楽文化については、筆者は多くを語るにはまだ未熟である。2004年から断続的に現地を訪れ聞きかじってきた情報を元になっているため、学問的に不正確なこともあるかもしれないが、現地の人々の理解ということで、ある意味、割り切って知り得たことを紹介するようにしている。従ってコンサート中の解説では曲の説明に重点を置いて行った。クグルシン氏のコーナーでは、彼のプロフィールの他、ドンブラについて、150年前からの曲解説、モンゴル在住カザフ人々の移動の歴史について、受け継がれる民族の歌曲、忘れられようとしている歌などがそれぞれテーマとなった。

## ＜クグルシン氏について＞

彼は産婦人科の医師免許を持ち、バヤンウルギー県中心地ウルギー市の総合中央病院人事課に勤務している。かつては、カザフ家庭にドンブラもまた演奏者も多く存在し、彼の父もまたドンブラを作り、また演奏する人だったそうで、たくさんの歌い手、弾き手の中で彼は育ち、

特に誰に教わることもなく、弾き語りが出来ようになった。学校で音楽教育も受けておらず、未だに楽譜を読むことは出来ない。

### <ドンブラについて>

細いネックに卵形の反響部、2本のナイロン弦が張られている。かつては、ヤギの腸を加工したガットが使われていたというが、今ではガットドンブラは存在しないらしい。ドンブラには二種類ある。俗称であるが、ジャンバル・ドンブラとアバイ・ドンブラの二つだ。現在のカザフスタンで作られ、舞台演奏者がよく使うのがジャンバル・ドンブラと呼ばれるタイプのものであるという。かつてジャンバルという演奏者がいて、彼がよく持ち歩いていたことからそう呼ばれるらしい。このドンブラは楽器背面の反響部は細い板が何枚も接着されて卵状になっている。モンゴル側では制作者は非常に少なく、カザフスタンから購入する方が良い楽器が手にはいるという。

もうひとつのタイプはアバイ・ドンブラと呼ばれる。かつてアバイという演奏者が好んで持ち歩いたことからこの名がついたという。こちらは、丸太をくりぬいて加工すると聞かされており、楽器背面部は平らである。反響部分が小さめであるために、当然音も少々小さくなっている。しかし、ジャンバル・ドンブラと比べて制作しやすく、また移動生活時にも壊れにくい構造になっている。コンサート中に紹介したアバイ・ドンブラは2004年の訪問時に道中で立ち寄ったカザフ人家庭で見つけ、譲ってもらったモノである。

### <カザフスタンとカザフ>

現在、カザフ民族は大きくわけて、カザフスタン、ロシア、モンゴル、中国に分断されて生活している。日本では、カザフというと即座にカザフスタンと理解される傾向が強いが、モンゴル国バヤンウルギー県在住のカザフ人々は、ロシアや清朝からの圧迫に屈することなく、故郷を捨てて移動を続けながら、今の土地に住み着いたという歴史を持つことから、カザフスタン人と同一視されることを嫌う傾向にある。カザフスタンのカザフ人たちはすっかりロシア化してしまったと言われ、現在の中国に住むカザフ人は漢民族化したと言われることが多いようだ。これらに対して、バヤンウルギー県在住カザフ人たちは他カザフ人たちよりも古い民族文化を強く継承維持して来ていると見なされている。コンサートでは、現在の新疆ウイグル自治区地域、つまりアルタイ山脈南麓から北麓に移動を余儀なくされた150年ほど前に作られた歌ウル・アルタイ、社会主義崩壊後に自由を得たカザフ人々が民族の故郷であるカザフスタンへと戻ろうとしたとき、彼らを見送るために作られた歌アクサパル（白き旅路）を披露した。

### <受け継がれるカザフ文化について>

2004年のカザフ旅行時、道中立ち寄った家で、家の中にいた全ての人々が同じメロディーに載せてアドリブで歌を歌ったのに遭遇した。小さな子どもから大人に至るまでが自由に歌を作ることが出来るという文化レベルの高さに驚愕したものである。クグルシン氏の言に寄ればかつては様々なことを歌に載せて伝え残してきたという。しかし、近年、外国音楽の影響などもあり、古いカザフの歌を知らない若者も増えているという。コンサートでは、もはや彼しか歌えないといわれる歌サガンシを披露してもらった。

### コンサート：ネルグイ氏の部

モンゴルの民族楽器としてもっとも有名なものが馬頭琴である。馬頭琴という故障については等々力政彦氏が詳しく、学問的な考察を加えているため、ここでは割愛する。なお、モンゴル国では、現在、モリンホール（モリントルゴイトホールの略）が一般的な呼称となってい

る。コンサートでは、ネルグイ氏のプロフ、馬頭琴の特徴、鉄道唱歌の謎、近代馬頭琴の成立過程、演奏のスタンダード化、民話紹介などを織り込んでの解説となった。

### ＜ネルグイ氏について＞

現在は、モンゴル国ドンドゴビ県ウルジート郡中心部に定住生活を送るようになっているが、つい2年ほど前までは遊牧生活を行っていた。社会主義時代には劇場勤めをしていたが、いわゆる社会主義時代の専門教育を受けた演奏家ではない。5, 6歳の頃、ラジオから流れてくる音楽を自らも弾いてみたいと思ったことがきっかけで、独学で馬頭琴を習得した。当時はたくさんの在野の演奏家があった時代であり、それぞれが独自に、かつ自由に馬頭琴を弾いていたという。特にゴビ地域は“歌と馬頭琴の故郷”と呼ばれる土地柄もあり、他モンゴル地域より在野の音楽家は多かったようだ。ネルグイ氏はそのような環境で育ち、馬頭琴を習得したという。彼は、在野の演奏家オランサイハンチとして活動していく中で多くのコンクールで優勝し、メダル、勲章を多く受けた経歴を持つ。文化第一功労者勲章や北極星勲章（モンゴル文化省が出せる最高位の勲章）を授与され、無形文化財に認定され、ユネスコからも注目をされるに至る高名な演奏者である。

### ＜馬頭琴について—成立、演奏のスタンダード化など—＞

馬の彫刻が楽器上部につけられている故に、馬頭琴と名付けられている。しかし、1970年代に入る前は、在野に制作者が多く存在し、大きさも作りも統一されたモノではなかったため、馬頭以外の装飾物がつけられていたこともあった。すなわち、楽器工房で専門職人が作るようになってから、“必ず”馬頭がつけられるようになったらしい。

馬の尻尾を束ねた2本の弦と弓をこすり合わせて音を出す楽器で、今では反響箱正面は板張りになっているが、かつてはヤギもしくは子ラクダの皮が張られていたという。これを1969年に当時のソビエトからチェロ演奏者がみて、改良を提案、より安定した、かつ大きな音を出せる楽器に発展させた。これを契機に馬頭琴は西洋のチェロのような楽器として成熟していくことを使命とされ、そのために様々な改良が施され、そして、演奏方法も確立され、さらに馬頭琴のための曲も作曲されるようになり始めた。この馬頭琴のチェロ化は演奏場所を飛躍的に広げ、多くの人々に聴かれることとなったが、同時に馬頭琴本来の演奏スタイルなどは、“ふるいモノ”として置き去りにされることとなっていった。

### ＜鉄道唱歌とモンゴル＞

“汽笛一声新橋を はや我汽車は離れたり 愛宕の山に入りのこる 月を旅路の友として”ではじまる鉄道唱歌は1900年に発表された日本の歌曲であるが、モンゴル人の多くはこれをモンゴル民謡と思っている。諸説あるが、聴くところに寄れば、満洲国時代に従軍慰安婦の方々が歌っていたのが国境の向こう、モンゴル人民共和国に伝わり、奇しくも歌詞内容が女性解放をテーマとしたモノに変えられ、広く流布し、ダンスホールなどで常に流されるダンス曲として定着したことに寄るようだ。なお、これについては今後も調査が必要であろう。

### ＜ジョノンハルについて＞

日本では有名な馬頭琴起源説話「スーホの白い馬」はモンゴル国ではあまり知られていない。モンゴル国での最も有名な馬頭琴起源説話は「フーナムジル」という話であり、そこに出てくるのはジョノンハルという翼の生えた黒い馬である。このジョノンハルという馬の名前は、いまでは最高の駿馬を表す言葉となり、馬頭琴演奏者は自分の思い描く最高の馬が駆ける様子を、“ジョノンハル”という曲で表現する。すなわち、演奏者の数だけジョノンハルが存在することになる。「オレのジョノンハルは〜だ。お前のジョノンハルはどんなだ？」という会話がお

互いに交わされるのである。ネルグイ氏のジョノンハルは、モンゴルでも大変有名な曲となり、現代精選馬頭琴演奏者集 CD には、この曲をもって登録されるに至っている。

### コンサート：セッションの部

モンゴル国においてカザフ民族は少数民族である。社会主義時代においては、モンゴル民族の下部集団に数えられており、独立した民族として認めていられていなかったが、社会主義崩壊後にはモンゴル国内の民族の一つとして認知されるに至っている。しかし、未だに多くのモンゴル人たちは、カザフ民族はもとより、カザフ文化については無理解、むしろ無関心である。それどころか、差別にいたる場合すらもある。

このような社会情勢下にあるため、モンゴル国で、馬頭琴とドンブラと一緒にステージにのって、同じ曲を演奏することは、まず、ない。実際、日本各地でこのセッションを聴いたモンゴル人の多くが、「こんな風になるなんて、思っても見なかった」という感想を寄せてくる。小学校のコンサートなどを行うと、終了後、「なぜ、あんなに素晴らしい演奏なのに、モンゴルでは一緒にやらないんだろう？」と感想を言いに来る子どもまで出てくる。いずれにせよ、今は日本でしか聴くことの出来ない両氏のセッションである。曲はモンゴル語の歌“清き川のほとりで”、カザフ語の歌“私の恋人は街に住んでいる”、馬頭琴曲“ジャラムハル”、“ウーレンボル”を披露した。

以上に簡単にはあるが、コンサート中の話をまとめた。

今回のコンサートは北海道民族学会としても初めての試みと言うことであったが、多くの人々に異文化に興味を持っていただく上で、わかりやすい場であつたらうと思う。私個人としては 100 人規模のコンサートにも出来たらうと思ひ、もし、次回の機会を頂けるのであれば、宣伝活動に力をいれたいと思う。

このような機会を与えてくださった北海道民族学会に深く感謝して、報告を終えたい。

(にしむら・みきや/NPO法人北方アジア文化交流センターしゃがあ)



ネルグイ氏（左）と筆者



2名の演奏者によるセッション